箭内健次先生の喜寿をお祝いして

駒沢大学史学会会長　所　理喜夫

箭内健次先生には本年一月十六日をもって、喜寿の賀を迎えられた。ますます御健勝にて研究と教育に努められていることは、まことに御同慶のいたりである。

年をとられると、考え方も固定し、意地と頑固の固まりのような方を見かけることがある。私もやがてあのようになるのかなと思う。しかし私たちは先生の御健康さと、それにもました思考様式の柔らかさに驚く。それは近年の御論稿「一九三四～五年シーボルト文献の来た頃―昭和初期シーボルト研究の回顧―」（『シーボルトと日本文化』法政大学、一九八五年）などに端的に示される。あるとき先生に「御健康の秘密は何でしょうか」とお尋ねしたことがある。しばらく間を置いて「強いて言えば暴飲暴食をしないことでしょうか」と答えられた。簡単なようできわめて難しいことである。

年をとられても温和な御人柄と柔軟な思考形態、それは天賦の素質に加うるにお育ちになった環境と幼年時からの頭脳の錬磨によろう。

先生は明治四十三年一月十六日東京市小石川区指ケ谷町一四七番地において、箭内亙先生の二男として生まれた。御尊父は著名な東洋史研究者で旧制の第一高等学校教授（現・東京大学教養学部）だった。『蒙古史研究』（刀江書院、一九二八年）は古典的名著で今日まで学会に影響を与えている。さらに先生は大正デモクラシーのさなか東京府立第六中学校（現・新宿高等学校）・旧制静岡高等学校文科乙類をへて、東京帝国大学に進まれる。高等学校時代にはとくに自由闊達な生活を送られたらしい。「丁度岩波文庫が刊行された頃でもあったので種類の如何を問わず買って読み、終るとすぐ街の古本屋に売り、又新本

を買う」（「箭内健次先生七十年のあゆみ」より）という乱読生活のなかで、ときには高歌放吟し、ときにはストライキを敢行されたという。

大学で国史学科を選ばれ、海外交渉史を専攻されたのもすでに遠い日の父君の影響も大きかったのではなかろうか。御卒業は昭和九年三月、今井林太郎・風間泰男・北山茂夫・鈴木良一・平田俊春ら各氏と御同期である。時まさに東大における官学アカデミーの内部に生じたふたつの流れが分裂し、対立を深めつつあった時期であった（北山茂夫「日本近代史学の発展」、『日本歴史』別巻一、一三七頁、岩波書店、一九六三年）。

先生は第三の途を歩まれる。昭和十一年台北帝国大学文政学部講師となる。昭和十三年から十八年にかけての御論稿をみれば、このころ東南アジア史と日本の対外交渉史の綜合をライフワークと決心されたのであろう。

敗戦後、無一物で台湾を引揚げられてきた先生は外務省・文部省・金沢大学・九州大学・東海大学へと転じ、昭和四十九年四月本学歴史学教室のお迎えするところとなった。あるとき「私ほど多くの現場を体験したものは少ないだろう」と嘆じられたことがある。まさにそれは戦後史学の研究体制再編成の足跡そのものとも言えよう。本学でもまた学部・大学院組織の編成整備の過程であった。大学院の専攻主任として、また人文科学第二研究科委員長代理として先生の果された役割りは大きい。各委員会における先生の一言には鉄石の重みがあった。

仕事の合い間の先生のお話しは楽しい。話題は学問論は言うまでもなく、まさに東西古今に及ぶ。いつまでも御元気で私たち後進を御教導たまわるよう祈念して止まない。